

「高校野球はやらぬ」。入学当初にそう決めたはずだった。しかし敗戦後、涙をためハンカチを握り締める幸福の科学学園の捕手津崎真之介の姿は紛れもなく高校球児だった。「終わったんだな」。声を震わせながらつぶやいた。

大分県出身で、いここにはプロ野球巨人のコー子村田修一さんがいる。津崎も野球界の「華麗なる一族」に名を連ねるが、「深く楽しめない」と中学までで野球をやめつつもりだった。

しかし部員の少ない野球部の熱烈な勧誘に負け、渋々入部。その後は1年から外野手でスタメンになると、3年では柵

取り戻した野球への情熱

幸福・津崎真之介捕手

橋誠「郎監督が「抜群のセンス。任せられるのは津崎だけ」とチーム事情から未経験の捕手に。気づけば中心選手になっていた。

大分の中学時代も野球



た。「楽しい」。そう感じるまで時間はかからなかった。

それからは持ち前の真面目な性格で人一倍練習に打ち込んだ。捕手転向後はエース阿座上隼平の球を「そらさないように」と自主練習にもまいった。

そんな津崎の最後は鹿沼にコールド負け。阿座上の球を受け止めきれずボールを後逸する場面も。「記録上は暴投になったけど多くは自分の責任」。悔しがる表情は野球人の顔だった。

部員わずか7人。現在の助っ人を集めて野球をする環境とさほど変わらぬない。ただ強敵相手でも諦めないチームカラーにはどんでんひかれていっ

「大学に進学して野球をやりたい」。今はそう思うようになった。村田さんとは毎年正月に顔を合わせるといっ

「(村田さんに)こんなこと言ったら驚くだろうな」と津崎は少し頬を緩めた。

(湯田大士)

敗戦直後、マスクを外し無念の表情を浮かべる幸福の津崎(中央)。最後まで真剣なまなざしで白球と向き合った。清原、菊地政勝撮影

